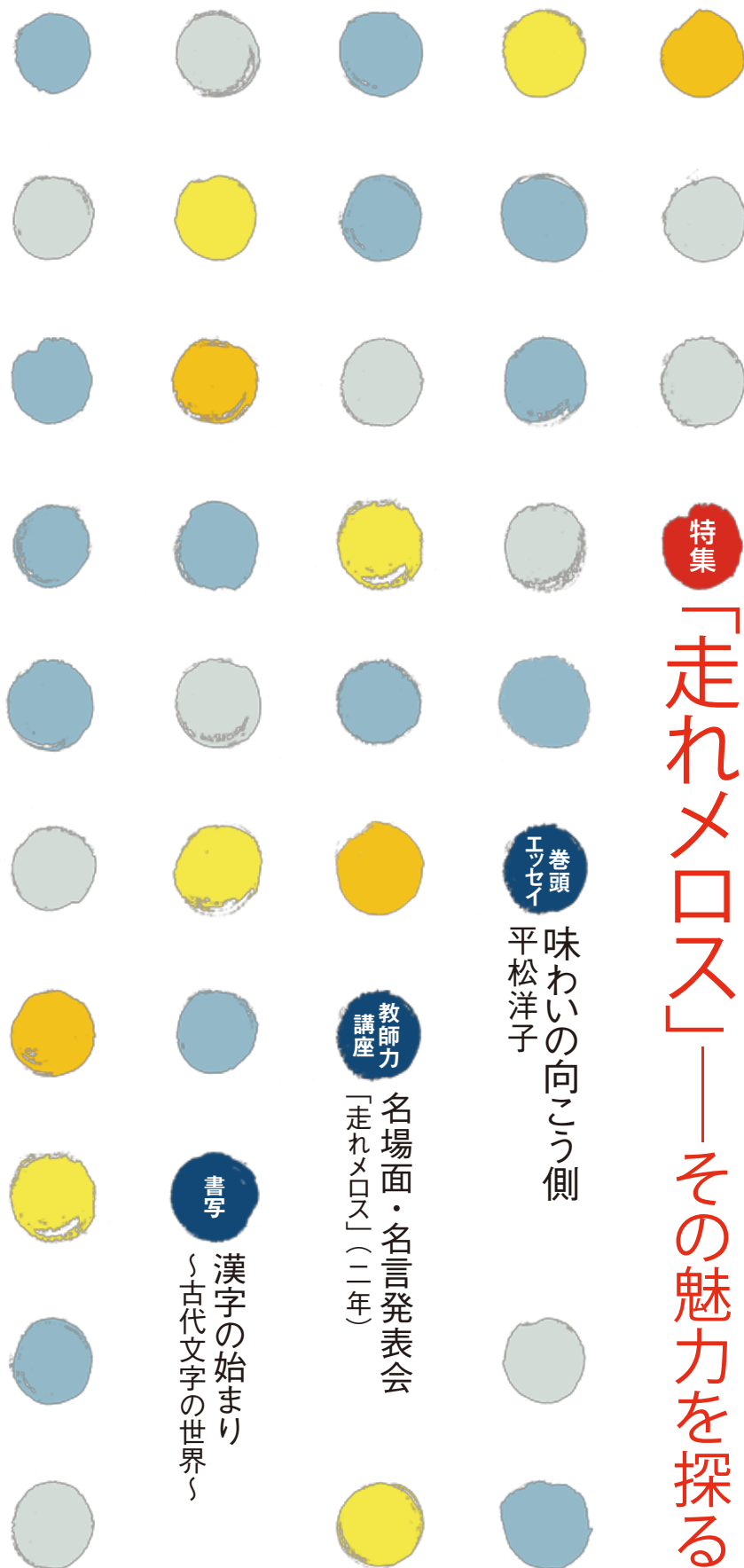




「つながる かざぐるま」

今年、光村図書は創立65周年を迎えます。

昭和25年に小学校国語「かざぐるま」読本を
刊行してから今日まで、

教科書や教材、書籍をつくり続けてきました。

このたび、会社の原点ともいえる
「かざぐるま」の羽をモチーフにした
シンボルマークを制定いたしました。

これからも、原点を忘れずに、
子どもたちへ、先生方へ、
私たちができることを考えてまいります。



光村図書

ロゴマークについて → www.mitsumura-tosho.co.jp/company/logo

中学校 国語教育相談室 通巻No.156 2014(平成26)年1月20日発行 定価126円(税込)
発行人＝常田 寛 発行所＝光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎 2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111
www.mitsumura-tosho.co.jp E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp 印刷所＝株式会社 加藤文明社 デザイン＝mg okada

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。詳しくは、光村図書ホームページをご覧ください。
www.mitsumura-tosho.co.jp 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書出版までご連絡ください。

どっぴん

早稲田大学教授
森山卓郎

先日、小学校時代によくやっていった「どっぴん」というボール遊びについて、東京の人と話をしようとしたら、全く通じなかった（私は京都市出身です）。地面にひとり分で一辺一メートルくらいのハコを、二人なら「田」、四人なら「田」のような形で書いて、その中に入って、一度落ちて（へそぐらいの高さに）跳ね上がったドッジボールを（両）手で打って相手のハコの中へ返す遊びだ。跳ねるとき「どっ」、手で打つとき「びん」という音がる。ほかの呼び方をする地方、そもそもそのような遊びがない地方、などいろいろあるようだ。

などさまざまな名称がある。私が小さいころは「探偵」と言っていた。学校関係の言葉にも地域差がある。例えば、黒板消しのことを鹿児島では「ラーフル」と呼ぶ。富山では模造紙のことを「ガンピ」という。「雁皮紙」という和紙との関わりはわからない。愛知では授業の間の休み時間のことを「放課」という。ほかの地方の人が聞けば「放課後」と誤解しそうだ。そう、方言差は時に誤解の元ともなる。以前、宮城県内のお店で「安売りをしていました」という案内を聞いたことがある。「安売りをしていました。でも、もう終わり。ざんねーん！」といった意地悪な意味なのかなと一瞬思ったのだが、よく見ると、安売りをしている最中。東北方言の一部では、状態を表す述語に「〜た」をつけた表

現を、現在のことについても使うことがあるのだ。実は、震災のとき、テレビニュースのインタビュで、確か「ガソリン欲しかった」というような地元の方言話者の表現を耳にしたことがある（あった？…共通語でも「た」の有無に迷うことはありますね）。直後の段階だったから、もしかすると話し手は「今も欲しい」という意味で言っていたのかもしれない。本当のところはどうだったのだろう。

地方の言葉や文化の違いを意識化することは大切なことだ。誤解も防げるかもしれない。地方の伝統にしっかりと敬意をもちつつ、違うことの大切さ、おもしろさを共有できればいいなと思う。ついでに「地域の遊び」も共有したい。ああ、なんだか、久しぶりに、どっぴんがやりたくなってきたなあ。

CONTENTS

探検！言葉の森22 どっぴん 森山卓郎

巻頭エッセイ
言葉と向き合う 02 味わいの向こう側 平松洋子

特集 04 「走れメロス」 ——その魅力を探る

わたしが思う「走れメロス」の魅力

太宰治の驚嘆すべき技巧について 内田 樹
「走れメロス」のスピード感 中沢けい
耳を澄ます 太宰治の再出発 斎藤理生
「学習の手引き」における「不易」と「流行」 藤森裕治
子どもたちをひきつけてやまない作品 甲斐利恵子

「走れメロス」さまざまなアプローチ 宗我部義則
伊藤彰郎 他

「走れメロス」の世界を広げる

教師力講座18 16 名場面・名言発表会「走れメロス」（2年） 甲斐利恵子

書写の世界を
広げよう3 20 漢字の始まり～古代文字の世界～ 鍋島稲子

味わいの 向こう側

エッセイスト

平松洋子

つい先日のこと、ともだちと連れだつて蕎麦屋の暖簾のれんをくぐった。冬の陽射しは気が早くて、ついさっきまで背中をぬくぬくと温めていたはずなのに、ふっと気づくと冷えの兆ししるしが忍びこんでいる。翳かげりがくわつた陽射しに寂しくなつて、どちらからともなく「寄っていかうか」ということになった。

午後四時近しいし、日暮れどきもすぐだし。あれこれ理由をこしらえて納得を取りつけ、熱燗あつたを二本頼んだ。いっしょに板わさ、海苔、蕎麦味噌。地下鉄に乗って帰るつもりだったのに、思いがけない成り行きにうれしくなつて相好を崩す。平日の日暮れ前、神さまからの贈りものである。

お銚子を傾け、蕎麦味噌を舐めながら、連れが言った。

「うまいなあ、ほんとうに」

わたしも蕎麦味噌に箸を伸ばしてひと舐めし、感に堪えないふうと言った。

「おいしいね、ほんとうにねえ」
連れが重ねて言う。

「焙あぶりたての焼き海苔を久しぶりに食べたらうれしくなつてさ、海苔の香りがずつと鼻の奥に残っている。その香りといっしょに蕎麦味噌、っていうところがこたえられない」

一瞬、意表を突かれて連れの顔に視線を置いた。そうか、このひとは、私とはひと味もふた味も違う蕎麦味噌を味わっていたのだ。ちよつとくやしくなつて、あわてて焼き海苔に箸を伸ばした。

こでもいいから、なにかに「響く」ことができたら、とひたすら願ひながら書いている。

おなじものを食べていても、それぞれべつものを食べている、と先に書いた。だからこそ、わたしは食べものを書くことから逃れられないのかもしれないと思う。

直裁に味を表現する言葉より、ほんとうは、その前後の文脈にこそ味わいの真実は隠されている。ひとつの味に出合うに至つた道すがら、味わいの中身に作用を及ぼす。いくら「おいしい」ものでも、じつはきわめて脆く、危なっかしい。たとえば、さっきまでおいしかったはずのものがあつというまに砂を噛むような味気なさに転ずる経験は、誰にも身に覚えがあるのではないか。

長年愛読している短篇に、岡本かの子「家霊」がある。ごく短い一篇だが、老いさらばえた老人の人生が小さな川魚のど

じように託されて語られ、掛け値なしにすばらしい。少し長くなるが、一節を引いてみたい。

「実を申すと、勘定をお払する目当てはわしにもうありませんのです。身体も弱りました。仕事の張気けいきも失せました。永いこともないおかみさんは簪かんざしはもう要らんでしようし。ただただ永年夜食として食べ慣れたじょう汁と飯一椀、わしはこれを摂らんと冬のひと夜を凌しのぎ兼ねます。朝までに身体が凍え痺れる。わしら彫金師は、一たが

平松洋子
ひらまつようこ

エッセイスト。岡山県生まれ。東京女子大学卒業。食文化と暮らしをテーマに執筆活動を行う。『買えない味』（筑摩書房）で第16回Bunkamuraドゥマゴ文学賞受賞。『サンドウィッチは銀座で』『ひざしぶりの海苔弁』（以上、文藝春秋）など著書多数。最新刊は本についてのエッセイ集『本の花』（本の雑誌社）。

たとえ肩を並べておなじものを食べていても、それぞれべつものを食べている。じつは異なる味わいを感じ取っている。味覚が感知しているのは、なにも舌にのせている味だけではない。知覚、嗅覚、聴覚、触覚、または記憶の断片。自分でも気づいていない遥かなものを、ひとは味覚として感知し、受け容うけいれているのである。食べものの味わいに奥深く入ろうとすればするほど、わたしはそのことを知るようになった。さらにいえば、味覚はかくも複雑だからこそ、「おいしい」「うまい」、表向きはいたって素朴で簡単な言葉で表現するのかもしれない。

食べものにまつわる表現は、つくづく難しい。できるだけ独りよがりにならないように、でも自縄自縛じじやくじばくに陥れば言葉の動きが鈍くなる。かといって、ちんまりと型通りに収まるのも楽しくはない。そもそも「食べる」というのは、心弾む楽しい行為であるはずだから。官能の端っ

ね一期です。明日のことは考えんです。あなたが、おかみさんの娘ですなら、今夜も、あの細い小魚を五六びき恵んで頂きたい。死ぬにしてもこんな霜枯れた夜は嫌です。今夜、一夜は、あの小魚のいのちをぼちりぼちりわしの骨の髄に噛み込んで生き伸びたい——」

（食魔）岡本かの子 講談社文庫

霜枯れた夜、小魚のいのちをぼちりぼちり骨の髄に噛み込む——老いの果てにある簪職人のいのち、どじょうという魚のいのち、ふたつが見事に重なり合い、どじょうの味わいがまぎまぎと浮かび上がってぞくりとする。どじょうの味のみならず、食べものと人間の関わりの真実の一端を、岡本かの子は描ききっている。

味覚を語る言葉は、つくづく怖い。味を語りつつ、書く自分という人間を語らせてしまう。その深みを覗のぞきこむことに魅せられたから、わたしは書き続けているのかもしれない。



特集

「走れメロス」

——その魅力を探る

光村図書の中学校国語教科書に「走れメロス」が初めて掲載されてから五十年以上が経ち、学校現場ではこれまで、さまざまな切り口で授業が行われています。

今回、多様な視点から「走れメロス」の魅力を探る中で、あらためてこの作品のおもしろさを考えてみたいと思います。

わたしが思う「走れメロス」の魅力

太宰治の驚嘆すべき技巧について

思想家・神戸女学院大学名誉教授
内田 樹

太宰治は「一行目でいきなり読者をわしづかみにする。」

「死なうと思つてゐた」(「葉」)、「子供より親が大事、と思ひたい」(「桜桃」)、「恥の多い生涯を送つて来ました」(「人間失格」)。いつも太宰は単刀直入に、一氣に話の本題に入る。こちらは襟首をつかまれて、いきなり物語のど真ん中に連れてゆかれる。自分が「どういふ話」の中に連れてゆかれたのかわからない。物語はもう始まって、ずんずん進んでいる。こちらは早足で歩く作者の背中を追つてゆくしかない。

「走れメロス」で太宰は一行目から読者をいきなり古代ギリシャの市を歩むひとりの青年の心の中に放り込む。説明もなにもない。いきなり見知らぬ男の激情の中に私たちは投げられてしまう。

「メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。」
読者は困惑する。「メロスって誰だ?」「王って誰だ?」「邪知暴虐って、何をした

んだ?」とにかく作家の次の言葉を待つしかない。それだけが読者にとっての「取り付く島」である。

「メロスは、村の牧人である。」それだけではわからない。
「笛を吹き、羊と遊んで暮らしてきた。」だからどうなんだ。

「けれども邪悪に対しては、人一倍に敏感であった。」三行目にしてようやくメロスの「激怒」の所以がほの見えてきた。このときはすでに読者は作家の自家薬籠中に取り込まれている。掌中を転がされている。たいした力業である。

だが、この短編での太宰の工夫はそれだけではない。すでに気づいた人がいるかもしれないが、太宰は物語のどこどこに、「韻文調」を仕込んでいるのである。

「花嫁は、夢見心地でうなずいた。」

「私は、今宵、殺される。殺されるために走るのだ。」

「私は信頼されている。私は信頼されて

いる。」

「フィロストラトスでございます。」

七五調で整えるのはこれが「作り話」というシグナルである。

ものはずみで「愛と信実」の話を書くことにはしたが、どうにも気恥ずかしい。とはいえ、こんな短い物語で作家の含羞を前面に出したら構成が破綻する。だから、表層を読み進む限り、何の屈託もなく、底意もなく、物語は淡々と展開する。けれども、音韻のレベルで作家は読者にひそやかな「目くばせ」をしている。

こんな話、あまり真剣に読むなよ、と。それがこの裏も表もないはずの物語にふしぎな厚みと奥行きを与えて、忘れがたいものになっているのである。



うちだ・たつる

東京都生まれ。思想家・武道家、神戸女学院大学名誉教授、東京大学文学部仏文科卒業。『漂流』(講談社)、『日本辺境論』(新潮社)など著書多数。私家版『ユダヤ文化論』(文藝春秋)で第六回小林秀雄賞を受賞。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

「走れメロス」のスピード感

作家・法政大学教授
中沢けい

「走れメロス」を読み返し、あらためて、その文章のスピード感に打たれた。冒頭で早くもメロスは暴虐な王の殺害を決心している。

「メロスには政治がわからぬ」「メロスは、村の牧人である」とメロスの性格を語る短い文章が続く。そして「メロスは単純な男であった」という一文が示される。この一文は正義感の強いメロスの性格を表すと共に物語の展開を速くしている。短く、そして、明瞭な一文が作品全体にスピード感を与えているのである。爽快なスピード感である。

このスピード感に飲まれると、政治に疲れた王の冷やかな心を見逃してしまふ。メロスが単純な男であれば、王は頭の回転が速すぎる男なのだ。頭の回転が速い王は「はは。命が大事だったら、遅れてこい。おまえの心は、わかつているぞ」とメロスが死を逃れる方法をたちどころに計算

して、メロスの耳元でささやくほどだ。これで、この物語にスリルが生まれる。メロスにささやかれた王の言葉はメロスにとっては誘惑であり、読者にとってはスリルとなる。

たった一人の妹の婚礼のために三日間の命乞いをしたメロスは故郷の村へと出発する。「初夏、満天の星である」という一文が伏線となつていくことなど、読者はまったく気がつかないだろう。人間が大きなものに包まれていることをその一文で味わう。伏線というのは、季節が初夏であり大雨が降りやすい季節であり、それがメロスの行く手を阻む展開がここから導き出されるのだ。

何でもないような短い文章の中に幾つもの伏線が隠れているところを拾い出せばキリがない。それもまた爽快なスピード感を呼ぶ仕掛けになつていく。このスピード感

が地中海地方の乾いた風土を語っているように感じられるのは、私が地中海地方を知らないためだろうか。

この作品が発表されたのは昭和十五年。東京で予定されていたオリンピックが日中戦争激化のために中止された年のことだと知った時、太宰治の中にあつた憧れがなんとなく解るような気がした。猜疑心によって次々と人を殺す王という存在は遠い昔のお話の中にもいるのではなく、きつとその時代の空気として存在していたのであろう。風を切る文章のスピード感をしみながら、そんなことを考える。



なかざわ・けい
神奈川県生まれ。作家、法政大学教授。一九七八年に『海を感じる時』(講談社)で群像新人賞、八五年に『水平線に』で第七回野間文芸新人賞を受賞。『黒髪海と青海の物語』(集英社)、『動物園の王子』(新潮社)など著書多数。

耳を澄ます

—— 太宰治の再出発

群馬大学准教授
斎藤理生

太宰治は「無頼派」として知られている。だがその数奇な人生に目を奪われ、彼の作品におけるさまざまな試みが見逃されてはなるまい。昭和十一年に出版された第一創作集『晩年』には、小説という表現形式を問い直す実験作が多く収められている。たとえば「道化の華」は、主人公たちの世界を書き綴る「僕」が登場する、小説の小説である。注目されるのは、この「僕」が自身の書き方にも言及し、やがてその自己言及そのものにさえ言及するようになるという、際限のない相対化がなされている点である。

語り手が自分の言葉を絶えず疑う。そうした繊細な表現は先鋭化して行くに従って、一般の読者にはついて行き難いものになる。太宰は昭和十二年の秋から約一年間、小説を発表していない。そこに私生活上の問題が影響していたことは事実である。が、同時に彼は創作上の壁にも直面していたようだ。

昭和十四年ごろから太宰は旺盛な執筆活動を再開する。作家としての仕切り直しにあたって、彼はそれまでとは違う方法を見つける必要があつた。十五年に書かれた「走れメロス」は、そうした当時の太宰の課題を重ねて読めると考えられる。

「走れメロス」は「単純な男」が変わる物語である。当初メロスは「愛」「正義」「信実」といった言葉を支えにしていた。だが帰り道で力尽きかける過程で、それらの観念を疑い出す。ついには「正義だの、信実だの、愛だの、考えてみればくだらない」と言い放つまでになつて、意識を失う。

しかし彼は再び走り出す。そして刑場に辿り着く直前には、「何一つ考えていない」吹っ切れた姿を見せるようになる。

自分が絶対化していた考えを相対化すること。それはひとつの成熟であらう。だが相対化は後を引きやすい。自分を疑い、その疑った自分を疑い、その疑いを疑い……と、出口のない螺旋に陥りがちだ。その罠

からはどのように抜け出せばよいのか？

意識を失ったメロスを目覚めさせたのは水の音である。王と議論し、花婿を説き伏せ、懸命に自身を励ましながら走っていた饒舌な男が、ここでは「何か小さくささやきながら」流れる清水に「耳を澄まし」ている。太宰自身は、この作品を含め、十五年ごろからパロディを積極的に書くようになる。『駆込み訴へ』『新釈諸国断』『お伽草紙』などの名作が生まれる。他者の言葉という源泉に耳を傾ける方法。それは、自分の言葉を疑うあまり空転していくことを抑止する役目も果たしたはずである。



さいとう・まさお
香川県生まれ。群馬大学准教授。太宰治を中心とする日本近代文学研究者。研究誌「太宰治スタディーズ」発行のメンバーでもある。著書に「太宰治の小説の(笑)」(双文社出版)、『新世紀 太宰治』共著、双文社出版がある。

「学習の手引き」における「不易」と「流行」

信州大学教授
藤森裕治

「不易流行」とは俳諧における美の在り方を言い表した表現である。常に新しいものに変えていくとする流行性の中にこそ永遠に変わることのない本質（不易）があり、両者は根源において一つの在り方に統合される精神を言う。しかし世間では、この四字熟語の真ん中に「と」を入れ、物事の変わらない面（不易）と変わりゆく面（流行）を示すことが多い。保守と革新という言葉もあるように、巷間目にする事象を捉える上では、本義とは異なる使い方も誤用とは言い切れない側面がある。

それでは「走れメロス」における「不易」と「流行」は何か。そんな問いから注目したのが「学習の手引き」の変遷である。

光村図書の中学校教科書に「走れメロス」が初めて掲載されたのは昭和三十六年である。以後、何度か姿を消す時期を経て、現在は中学二年の国語科を代表する文学教材としての存在感を誇示している。

本作品の「手引き」に見い出される「不易」

は、「メロス」と「王」の心理と人物像を考えさせる課題である。これにかかる問いは「手引き」全体の六割強を占める。もとより登場人物の心理や人物像を問うのは文学の常だが、「走れメロス」ではその「変化」に光を当て、「メロス」と「王」という存在を比べながら読み取らせる点に特徴がある。一方、「流行」の典型は、読後感に対する問いの変化である。昭和四十四年度版で、「どの場面に感動したか」と問いかけていた「手引き」は、平成十八年度版になると「メロスの生き方について、共感できたか、できなかったかを話し合ってみよう」になっている。「走れメロス」を読めば感動することを前提とした「手引き」は、平成二年度版が最後である。近年はPISA型読解力を育成するため、作品を批評する活動が取り入れられている。

ある時期だけ登場した「流行」も少なくない。例えば昭和四十七年度版から平成二年度版にかけて、「朗読しよう」という課

題がある。この時期の学習指導要領は、領域が「表現」と「理解」の二項であり、両者をつなぐ言語活動として注目されていたのが朗読だった。

かくして「不易」も「流行」もある「走れメロス」の「手引き」だが、「不易」においても「変化」がキーワードとなっていることは象徴的である。国語教科書の文学作品中で、「走れメロス」は登場人物が圧倒的に多く、延べの人名名詞の数も三五六語と、二位の「故郷」を一〇四語も上回る。「走れメロス」とは、たくさん的人物を関係させながら「走る」変化する「物語」として読者をひきつけるのである。その意味では「不易流行」を体現した小説の典型と言えるかもしれない。



ふじもり ゆうじ
長野県生まれ。信州大学教育学部教授。専門は国語科教育学（授業研究、日本民俗学）。著書に「国語科授業研究の深層——予選不可能事象と授業システム——」（東洋館出版社）など。光村図書中学校「国語」教科書の編集員を務める。

子どもたちをひきつけてやまない作品

港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子

「走れメロス」ほど、最初の一読で子どもたちをひきつける作品はないと思います。普段は教師の音読を集中して聞けない子も、この作品だと最後まで集中して耳を傾けます。それは、太宰の文章の魅力を、子どもたちが身体で感じ取っているからなのだと思います。

声を出して読ませ、言葉の世界に浸らせるのはもちろんですが、私は、「この言葉がいい」「作品のここがいい」「なぜいいと思うのか」……と、作品のすばらしさを楽しんで語り合うことで、「走れメロス」の魅力をより深く味わいたいと思っています。

そのため、三年前から「名場面・名言発表会」という実践を行っています（本誌P16参照）。「走れメロス」の中で、特に好きな場面を選び、その場面についての自分たちの思いを話し合い、まとめます。本文を朗読し、選んだ場面の中で名言だと思う文章を抜き出し、みんなで声に出して読みます。

この授業で大事にしているのは、「文章を声に出して読むこと」と「文学作品を語る語彙力を身につけること」。この作品を読んだことで、他の作品についても、いろいろな視点で読んだり語ったりできるようになるといいなと思います。

私の教室では、一年生のときに「星の花が降るころに」（二年）で、「作品のよさを語り合おう」という単元を学習しています。そこでは、「情景描写」「人物設定」「ストーリー展開」「心情の変化」など、作品のよさを語るための言葉を学び、自分の考えを二百字でまとめさせました。

「走れメロス」では、その学習も思い出させながら、作品のすばらしさをグループで話し合ってみようと思えます。一年生のときと違い、子どもたちは登場人物の心情の深い部分まで読み取っていきまします。「名場面」として多く挙げられるのは、メロスが走るのを諦めようとする場面。二年生の三学期にもなると、登場人物が複雑な心情を

抱えた、このような場面を選ぶようになるのです。それは、子どもたちの内面も複雑になってきているからなのかもしれません。

「約束を破ろうとするなんて、メロスは弱い人間だ。でも、誰しもそういう部分はあると思う」と、子どもたちはメロスを語りながら、実は、自分自身のことを語り始めます。メロスのおかげで、知らず知らずのうちに自分と向き合うことができるんですね。そういう意味でも、「走れメロス」は語りがいのある、すばらしい作品です。一、二年生で身につけた国語の力を総動員して臨みたい作品だと、私は思います。（談）



かい りえこ
福岡県生まれ。東京都港区立赤坂中学校主任教諭。専門は国語科単元学習。著書に、「子どもの情景」（共著・光村教育図書）、「聞き手話し手を育てる」（共著・東洋館出版）など。光村図書中学校「国語」教科書の編集員を務める。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

「走れメロス」さまざまなアプローチ

学校現場では「走れメロス」を使って、さまざまな授業が行われています。今回は、その中でも特色ある実践をピックアップしてご紹介いたします。

実践1 シラーの「人質」と比較して読む

単元名

「走れメロス」

文学の言葉と表現の意図

お茶の水女子大学附属中学校教諭

宗我部義則

1 単元のねらい

「走れメロス」の原案となったシラーの「人質」(学習指導書2下 P.207-210)と比べ読みをし、太宰が何を肉付けし、どう書き換えているのかを見ていくことで、表現に込められた太宰の意図や工夫を探る。

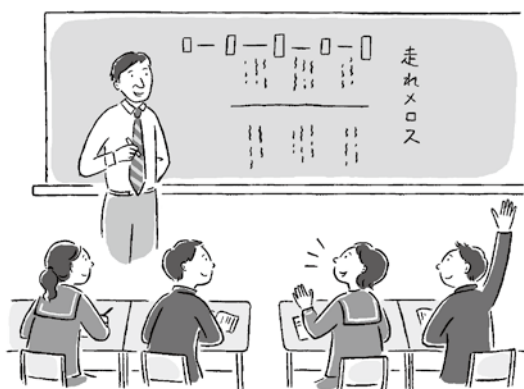
2 学習の展開

- ① 学習のガイダンスと全文の通読
 - ・ 学習の目標をつかむ。
 - ・ 「走れメロス」の全文を読み、感想をまとめる。
- ② 感想の交流と「人質」の通読
 - ・ 感想を交流し、読みの視点や受け止め方を広げる。
 - ・ 原案の存在を知り「人質」を通読して、異同について自分の気づきをまとめる。
- ③ 「人質」との異同を発表し合い、読みの視点をもつ。
 - ・ 気づいた異同を「走れメロス」の展開に沿って整理する。
 - ・ 両者の違いから問いを立てる。
 - ・ モデルを見て、表現の意図や効果について自分の考えをまとめる。

- ④ グループで交流し、各自が考えた表現の意図や効果について検討し合う。
 - ・ 表現の意図や効果について各自の考えをグループで交流する。
 - ・ 交流による気づきや深まりを全体で発表し合う。
- ⑤ 学習のまとめをする
 - ・ 取り上げた表現や内容をもとに「走れメロスのヒミツ」レポートをまとめる。

3 授業の様子・生徒の反応など

当初、生徒たちは「走れメロス」そのままの内容の「人質」の存在に戸惑いを隠せない様子だった。しかし、どちらの作品がおもしろいか尋ねると「断然メロスのほうがおもしろい」と答える。そこから、「では、なぜメロスのほうがおもしろいんだろう。その秘密を解き明かしていこう」と投げかけた。



生徒たちには、「走れメロス」と「人質」を全文掲載した二枚のA3のプリントを配布し、二つのテキストを見渡して比較できるようにした。両者の違いを確かめていくと、やがてメロスや王の人間性、メロスの葛藤やセリヌンティウスとの信実など、太宰が膨らませた内容が鮮明になる。また、山賊やフィロストラトスなど端役に見える人物の設定まで変えて再構成している様子に気づき、「太宰はなぜこんなふうに変えたのか」「味わいを深めている表現のヒミツは何か」といった問いが鮮明になってくる。生徒たちは主体的にテキストを読み込んでいき、次のような意見を出していった。

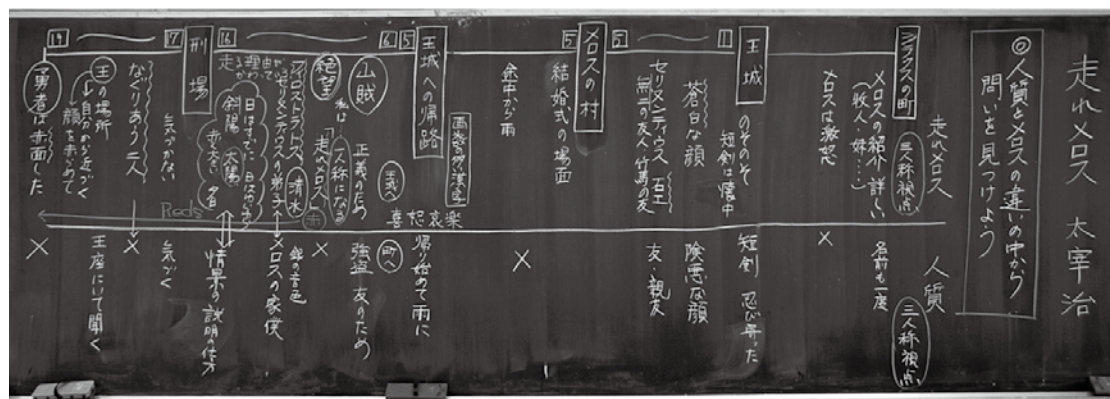
○「人質」では、友・親友としか書かれていないセリヌンティウスが、「走れメロス」では「石工」という設定になっている。これは、固い石さへ砕き削る石工から、セリヌンティウスが友を信じることを貫き通す、信じる心の固さのイメージが生まれるようにしたのではないか。

○フィロストラトスが「人質」ではメロスの下僕。ということはメロスはシラクス

4 考察

筋書きだけの原詩と比較することで、人物の人間性や心情、作品の主題等が浮かび上がらせる言葉や表現、「文学の言葉・表現」こそが注目されることになった。

表現を作り出した作者の意図を考え、一つ一つの言葉や表現を意味づける中で、自分の読みを形成していくことを楽しむような読み方を、経験させることができたと思う。



▲板書例 上段は「走れメロス」、下段は「人質」。場面ごとに違いを書き出していく。



特集



実践2 語り手の視点に着目して読む

単元名

「文学作品での語り手の視点を読む」

鹿児島市立明和中学校教諭

伊藤彰郎

1 単元のねらい

「走れメロス」と、他のさまざまな作品の語り手の視点を読み比べ、文学作品における語り手の視点の重要性を考える。

2 学習の展開

- ① 学習の流れを知り、全文を通読する。
- ② 二種類の語り手（一人称・三人称）による他の作品を通読し、語り手の立場の違いに気づく。
- ③ 「走れメロス」の語り手の立場が三人称であることに気づく。
- ④ ②で通読した三人称の文章と、「走れメロス」の語り手の異同について考え、グループで意見を交流する。

- ⑤ 「走れメロス」での語り手の効果や作者の意図を考え、交流する。

3 授業の様子・生徒の反応など

一人称（語り手＝中心人物）・三人称（第三者）による、視点や立場の違いに着目させていくつかの文章を通読させると、生徒たちはすぐに語り手の視点の違いを認識した。また、一年のときに「少年の日の思い出」で、語り手の視点を変えて書く学習もしている。そのことも想起させながら、再度「走れメロス」を読み返し、「第三者による語りでありながらも、『メロスほどの男』等の表記から、かなりメロスに肩入れした視点で語られている」という意見と根拠が、グループでの意見交流から表出した。「三人称＝客観的な語り手」というイメージをもつ生徒たちは、「なぜ太宰は、そのような語り手を設定したのか」という問いに対して、意欲的に解答を導き出そうとし、次のような意見が出された。

○あえてメロスに好意的な表現で述べることで、読み手に「勇者とは何か」ということを考えさせようとしているのではないか。

○メロスは完璧ではなく欠点もある人間だが、それが人間というものだ。太宰自身



メロスのような正直な人間に対して憧れを抱いていて、それが勇者という評価につながっている。

4 考察

文学作品において、「語り手＝作者」であると安直に認識している生徒は少なくない。文学作品における語り手の立場を意識して読む学習を経て、作者の意図や表現の効果について読み深めようとする姿が現れた。また、そこから、人間の在り方に対する深い考察を行おうとすることで、作品の魅力や奥深さを味わおうとすることにつながったと思う。

実践3 インタビュー形式で読みを深める

単元名

「メロスにインタビューしよう」

札幌市 中学校教諭

Y先生

1 単元のねらい

「走れメロス」の描写や会話に着目し、登場人物の心情の変化と場面の関係性を捉え、グループごとにインタビュー形式の発表を行うことで、作品をより豊かに味わう。

2 学習の展開

- ① 学習の流れを知り、全文を通読する。
- ② 四人グループになり、表現に着目し、場面の变化を読み取る。
- ③ メロスとインタビュアー二人と司会者を決める。どの場面をインタビューの中心にするか話し合う。
- ④ グループで読みを深め、インタビュー発表の原稿を完成させる。
- ⑤ 各グループでインタビュー発表をする。



▲司会とメロス役の生徒が前に立ち、インタビュアーの二人は、自席から質問を投げかける。記者会見のイメージ。

3 授業の様子・生徒の反応など

「走れメロス」を読み、生徒に一次感想を聞くと「王様のひどさ」や「メロスの強さ」、「セリメンティウスの潔さ」などが述べられた。しかし、深く読み込む生徒からは「王様／メロス／セリメンティウスの弱さ」も挙げられた。そこで、これらの感想をもとに、どの場面でなぜそのような心情が変化していくのかという問いを示した。

激怒から始まる物語はさまざまな場面での心情の変化が読み取れる。そのため、生徒は場面ごとに分担を決め、読み込み、グループで交流し、心情の変化や人物像を捉えた。その後、グループで印象的だった場面をインタビュー発表の場面に選んだ。「妹の結婚式の場面」や「山賊に待ち伏せされ走れなくなる場面」、「フィロストラトスに会い走り続ける場面」、「セリメンティウスの頬を殴る場面」などが多く選ばれた。

4 考察

学習指導要領の第二学年「読むこと」(イ)「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てること」【文章の解釈】に沿って授業を進めたが、メロスの言動を読み込み、深めることで作品の全体像がより鮮明に直接的に読者に伝わるということがわかった。また、四人グループで学習することによって、自分の考えと他者の考えの相違点を交流し、より深い読みへとつながっていくということも感じられた。

発表では、メロス・インタビュアー二人・司会者という四人で構成し、メロスにインタビューする形式で各グループの読みを発表した。根拠になる言動を物語の中から拾い、解釈を述べた。同じ言動でも捉え方が異なるグループもあり、発表後さらに意見を求め、全体で内容を深めることができた。

授業の振り返りでは、「物語を読み込むことで、自分とメロスが一体化していく感じがした」「メロスが大切にしているものは、自分も大切にしているものだから共感がもてた」「登場人物の喜怒哀楽に引き込まれ、もっと作品を読み深めたいと思った」などの感想をもつ生徒が多かった。

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

実践4 読むことで 自分と向き合う

単元名

「走れメロス」に映る 自分を見つめよう

横浜市 中学校教諭
M先生

1 単元のねらい

「走れメロス」を扱うときは、次の二点を学習の軸に据える。

- (1) 物語によって心が揺さぶられる読み手Ⅱ
自分自身を見つめること
- (2) 多くの人が同様に感じることと、自分を振り返って見つめたときに感じることを両方をたどりながら読んでいくこと

2 学習の展開

第一次では、あえて通読せず、物語の進行にシンクロしながら、場面ごとに次の活動を行う。それにより、一つ一つの表現に即した自分なりの考えが出やすくなる。

① 印象に残るフレーズを挙げ疑問をもつ。
例えば、「おまえの兄のいちばん嫌いな

ものは、……」(P186)に注目した場合、へではメロスが「好きなもの」は何だろう?と考える。全体を六つの場面に分け、疑問の答えを自分なりにまとめる。

② 場面ごとに自分だったらどうするかを考える。メロス、王、セリヌンティウスなど比べ、自分を振り返り、なぜそうするのか根拠をもってまとめる。

第二次では、意見を交流する。①については多くの人の考えや想像が意外にも似通っていること、②については読み手によって考え方やその背景が多様であることなどに気づきながら話し合いが進む。

第三次では、文章を再読し考えをまとめる。①、②それぞれ印象的なところを取り上げる。他の人の考えと比べたり、自分自身を振り返ったりしながらまとめる。

3 授業の様子・生徒の反応など

再読後にまとめた文章からは、次のような感想が聞かれた。

「私も今以上に友と向き合いたい」「王は目に見えない恐れから人を疑った。そういう弱さは僕にもある」「私も逃げたくなることがある。でも裏切り者になるより、王を見返して死ぬような生き方のほうがよっぽどよい」「命をかけられるほどの友人は



自分にはいない。でも裏切られるつらさは痛いほどわかる」「メロスはいつも自分を信じた。僕にはない勇気や誇りをもっている」「約束を守ることや人の命以上に大きなものとは何か。メロスにはそれがあったから走れたのだと思うと、生きるために必要なものののだ。僕もそれを見つめたいと思うた」

4 考察

「走れメロス」は、教室で扱う前に一読している生徒も多いが、自分自身と向き合いつながりながら読むことで何度も読める作品となる。このような作品は読むたびに新たな発見があり、いつしか座右に置くこととなる。作品が長年読み続けられるのは、人間の持つ普遍的な価値観を根底に有していると同時に、いつでも読み手の人生を映す鏡となるからだ。この学習を通して、文学的文章がもつそんな価値に気づかせ、生徒たちの自発的な読書の幅を広げさせたい。

イラスト：田上千晶

「走れメロス」の世界を広げる

中学生が楽しめる、
書籍やDVDなどを紹介します。

読む



新釈 走れメロス
他四篇
(森見登美彦／祥伝社)

大胆に生まれ変わった現代版「走れメロス」。京都を舞台に大学生が疾走する、痛快な1冊。



知っておきたい日本の文学
太宰治
(角川学芸出版)

太宰治の作品と彼自身の魅力を一冊で味わうことのできる、ダイジェスト版の文学案内。



若いうちに読みたい
太宰治
(斎藤孝／筑摩書房)

悩み多き青春時代に読みたい18の太宰作品を、斎藤氏ならではの切り口で紹介。

観る・聴く



【CD】
国語指導 CD 2年
(光村教育図書)

教科書教材の朗読音声を収録。「走れメロス」は、俳優・橋爪功が朗読。深みのある声が、作品世界にさらなる奥行きを与える。



【DVD】
青い文学シリーズ「走れメロス」
(株式会社ハピネット)

人気漫画家・許斐剛がキャラクターの原案を務めたアニメ。迫力ある映像で作品が楽しめる。メロスの声を俳優・堺雅人が担当。

訪れる



太宰治 文学サロン
(東京都三鷹市)

三鷹での太宰の写真、初版本などの資料が展示されている。ガイドボランティアが展示ガイドを行ってくれる。定期的に作品朗読会も開催。

アクセス：JR 三鷹駅南口より徒歩3分。
H P: <http://mitaka.jpn.org>



太宰治記念館「斜陽館」
(青森県五所川原市)

太宰治の生家。執筆用具、直筆原稿などが展示されている。太宰の息づかいが聞こえるような趣のある木造建築は、築100年を超える国の重要文化財である。

アクセス：津軽鉄道金木駅から徒歩7分
H P: <http://dazai.or.jp/modules/contents/class-a01.html>

特集

「走れメロス」——その魅力を探る

名場面・名言発表会

使用教材：「走れメロス」（二年）



「走れメロス」の魅力はなんと言っても「言葉」「文章」です。圧倒的な力があり、子どもたちはぐんぐんひきつけられます。そのため、「言葉」や「文章」をじっくり味わうような授業にしたいと思いました。

今回の授業は、昨年度に取り組んだ「作品のよさを語り合おう」『星の花が降るころに』の流れを踏まえています（弊誌No.69参照）。文学を語り合う楽しさをよりいっそう実感し、文学を語る語彙を習得できる単元を設定しました。

第一時 学習の流れと目標の確認 名場面を考える

単元びらきにはいつも「学習の流れ」というプリントを配ります（図1）。それにより、どんな学習をして、何時間かけて、どんな発表をするのか、教師と子どもが「学習の流れ」のイメージを共有することができからです。さらに、今回はそのプリントに、これまでの学習がどんなふうに関わっているのかも明記しました。一年のときに学習した「作品のよさを語り合おう」「星の花が降るころに」、『竹取物語』名場面発表会、二年で学習した『アリスプラネット』くぐりちゃんの魅力、『短歌の世界』鑑賞文を書くなどの単元で身につけた力を使って学んでいくということを、子どもたちに意識させました。

そして、いよいよ「走れメロス」に入ります。「場面を選ぶ」という意識で読み、

各自に、名場面の候補を考えさせます。そして、名場面を決定します。

第二時 発表のイメージをつかむ 名場面を決める

私は、学習のゴールを常に具体的にイメージできるように心がけています。今回は、事前に「発表のてびき」という台本の例をつくりました（図2）。台本形式にすることで発表の様子がイメージしやすく、押さえておきたいことがはっきりします。教師があらかじめ、発表の明確なイメージをもつことは、指導するうえで重要なことです。

朗読あり、コメントあり、名言探しありで盛りだくさんの内容ですが、今までの積み重ねがあれば大丈夫だと判断しました。台本をみんなで読みながら、これからの学習をイメージするのは楽しいものです。

図1 「学習の流れ」の内容

【学習の流れ】

- 一、学習の流れを知る（単元についての説明）……………一時間目
- 二、発表の概要を知る
- 三、「走れメロス」を読む（名場面の候補を考える 個人で）
- 四、グループ分け
- 五、発表のイメージをつかむ（台本形式で）……………二時間目
- 六、グループ内で話し合う……………二時間目～五時間目
 - ▼名場面を選ぶ（『竹取物語』名場面発表会）
（どんな場面か：○○が○○で○○する場面です）
▼群読の工夫を話し合う
※いろいろな工夫をする（『朝のりレー』）
- ▼内容把握＋作品のよさ＋批評
 - ・人物像をつかむ・心情をつかむ・作品のよさを語り合う
（『アリスプラネット』）＋（短歌他）＋（星の花が降るころに）
- ▼発表用の原稿を検討する
- ▼名言を選ぶ
- ▼レジュメの清書・発表の分担を決める
- 七、発表の練習・リハーサル・発表会……………六時間目～七時間目
- 八、発表会……………八時間目
- 九、まとめ
 - ・講評
 - ・学習の振り返り

【目標】

- 文章を読んで、場面をつかむ・心情をつかむ・作品を分析する（批評する）。
- 朗読の工夫をし、堂々とした発表をする。
- 効率的な話し合いができるように工夫する。

図2 「発表のてびき」プリントの一部

「走れメロス」名場面発表会

■発表のてびき■

1 朗会	これから、一冊の発表をします。よろしくお願ひします。 では、私たちが選んだ場面について説明します。	名前（ ）
2 甲斐	私たちの班が選んだ名場面は発表資料集●ページの部分です。	あいさつ 明るく強りのある声 で
3 朗会	では、朗読します。	選んだページ・軒
4 全員	メロスは激怒した。必ず、かの邪知悪慮の王を降かねばならぬと決意した。（後略）	場面説明 100字・150字
5 朗会	次にこの場面についてのコメントを発表します。	コメント 350字・400字
6 甲斐	この場面は先ほど言ったように、まさにこの物語の結末の部分です。メロスは結末式のために街にやってきました。ここにもあるように、メロスは結末式を待ちきれません。きつと結末の結末を見たいと思っています。結末式のためには来たのですから、気分も明るく、そしてや竹馬の友、セリメンティウスに久しぶりに会うのだから気分は上々という状態だったと思うのです。	登場人物の心情 登場人物の心情
7 朗会	しかし、町の様子の変化に気づき、王の暴君ぶりを聞いたとたんメロスは激怒するのです。メロスという男は、本音に単純でまっすぐな性格だと分かります。王城の中に入っていきくと自他無慮だし、自分の命を顧みないで正義を貫こうとするとここに彼等は驚かされます。こういう人間は現実の世界にはあまりいないでしょうし、僕としてはこういう友達はいまほしくありません。	批評（人物像） 作品の分析（よさ） 人物設定 場面設定 ・場面説明 ・人物設定 ・ストーリー展開 ・心情の変化 ・結末 ・名言
8 甲斐	メロスは激怒した。必ず、かの邪知悪慮の王を降かねばならぬと決意した。それではみなさん、サビートアフターミー！	名場面を決める 紙に書いて黒板に掲示 堂々と リビートアフターミー！ 声をそろえて
9 クラス全員	メロスは激怒した。必ず、かの邪知悪慮の王を降かねばならぬと決意した。	

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子

第三時〜第五時

発表の準備

■ 場面説明をどうするか

自分たちの選んだ場面を100字で説明する文章を書きます。それを持ち寄って、グループとしての原稿を仕上げます。

■ 朗読・群読の工夫をどうするか

群読は、一年の最初に谷川俊太郎の「朝のリレー」という詩で練習済みです。また、「のはらうた」の朗読発表会も経験しています。古典の朗読も含めて、教室で大真面目に声を出す習慣がついているといい発表になると思います。

■ コメントをどうするか

選んだ場面について、350〜400字でコメントをまとめます。今回の取り組みでいちばんねらっていたこと、しかしいけばん難しいことでした。

文学を語るにはそれなりの語彙力が必要だと思います。内容をしっかりと読み取る語彙力と、文学を語るための語彙力、その両方が必要になります。一年のときからどれくらい言葉を意識して指導してきたかが問われると思います。一年の「星の花が降るころに」の単元で使った言葉を中心に、

「少年の日の思い出」、二年の「アイヌプラネット」、「平家物語」など、今までの文学の単元で使った言葉を振り返り、それを意識して使うように指導しました。一人一人がコメントを書き、「持ち寄っていいものに仕上げていく」という場面説明のときと同じやり方で行いました。

■ どの言葉を「名言」にするか

この話し合いはおもしろいものでした。

「メロス、君は、真っ裸じゃないか」を選ぶほうとした子に反論する子の理由が立派なものだった。 「やんぬるかな」のひと言の重さを語る子がいたり、まさに小さな読書会が行われていました。選ばれた名言には「えい、えいと大声上げて、自身をしっかりと走った」「ふと耳に、せんせん、水の流れる音が聞こえた」「いや、まだ日は沈まぬ」「間に合う、間に合わないは問題でないのだ」などがありました。どこをとっても「名言」になるのがこの作品の力だと思っています。

■ 発表の流れ・分担をどうするか

私は、子どもたちが一年生の頃から、何か発表するときには、自分たちでプログラムを考えさせるようにしています。役割分担の決め方も、友達のことを知っている二年生ならではの話し合いでした。

があるからこそ、「走れメロス」は長く愛され続けているのではないのでしょうか。

* * *

このコメントも、場面説明の100字の文章も、すべて朗読の練習をし、いい発表になるようにしました。

大きく息を吸う、声を前に出す、声の「張り」を意識する、話すような自然の流れで読む——その練習です。司会を担当す

◀ 図3 講評のときに配布するプリント（一部）

「走れメロス」 名場面・名言発表会 まとめ（講評）

■ 文学を読み、味わうための表現集 ■

【一班】
■ 口には出していない彼の心の叫びが、まるで大きな鐘の音となって鳴り響いているように思えます。

■ 「走れメロス」の心情は目まぐるしく変わるのです。

■ 正義を貫く自分と認めようとする自分との心の葛藤をするメロスは、正義を貫くヒーローでは終わらず、人間らしい黒い部分を見せてくれます。

■ 人は誰しもそのような様々な感情が混ざり合い、ひと言では言い難い感情を抱えているのではないのでしょうか。

■ メロスを現実から遠く離れた人物として描いているのではなく、読者が広く共感できる人物として描いたことでこの物語に更に厚みを出しているのだと思います。

■ こうして、人間の心理を描くことで、読者は感情移入しやすくなります。

■ この場面があるからこそ、「走れメロス」は長く愛され続けているのではないのでしょうか。

行動を読む

心情の変化

心の葛藤

人は、

（抽象化・普遍化）

読者の共感

厚みを出している

感情移入

場面があるからこそ



第六時〜第七時

発表の練習・リハーサル・発表会

次は、メロスが走るのを諦める場面を選んだグループのコメントです。

* * *

この場面は先ほど言ったように、メロスが友との約束を諦めそうになっている場面です。ここでは口には出していないはずの彼の心の叫びがまるで、大きな鐘の音となって鳴り響いているように思えます。

ここでメロスの心情は、めまぐるしく変わるのです。正義を貫こうとする自分と、諦めようとする自分。葛藤をするメロスは、正義を貫くヒーローでは終わらず、人間らしい黒い部分を見せてくれます。しかし、

る子も同じです。朗読の部分は一グループずつ、私の前でリハーサルをします。最後の仕上げとして、実際の発表と同じように行います。

第七時〜第八時

発表会・まとめ・講評

図3は、講評のときのプリントです。

「文学を読み、味わうための表現集」として、子どもたちが実際に使った言葉を明記したものです。コメントの中にあつた言葉・表現に着目すると、文学を読む力につながる語彙が多く出てきます。それを意識化・顕在化することが目的です。

私は、単元が終わるときは必ず、この「まとめ」の時間が必要だと思っています。この単元で何を学び、何ができて何が課題として残っているのかをきちんと言葉にする仕事です。教師は、子どもたちの学びを言語化し、蓄積していくという意識をもたねばなりません。この「まとめ」の時間がないと、「活動あって、力なし」ということになりかねません。私たち教師が常に「言葉を教える仕事」をしているのだと自覚したいものです。

3 漢字の始まり ～古代文字の世界～

書写の教科書では、「漢字ワンダーランド」(P3)というコーナーで、漢字の始まりから現代の文字に至るまでの流れを紹介しています。連載の最終回となる今号では、漢字の原点に立ち返り、古代文字の不思議な形とその魅力についてお話ししていきたいと思ひます。

1 最古の漢字は甲骨文

現在のところ、最古の漢字は、殷時代の紀元前十三世紀前後より十一世紀中頃まで、二百数十年にわたって使用された甲骨文と考えられています。甲骨文とは「亀甲・獣骨文」の略で、その名の通り亀の甲(腹甲)や獣の骨(主に牛の肩胛骨)に刻まれた文字です。

十九世紀の末に河南省安陽市付近の殷墟(殷王朝の遺跡)から出土し、その数は十萬片以上といわれていますが、約一割が日本国内に所蔵されています。国内での大きなコレクションは五つあり、第一位が京都大学人文科学研究所の約

三千二百片、第二位が東京大学東洋文化研究所の約一千三百片、第三位が天理大学参考館の約七百片、第四位が東洋文庫の約六百片、そして第五位が台東区立書道博物館の約五百片です。

2 甲骨文の内容

甲骨文にはどんなことが書かれているのでしょうか。実はこれ、殷時代に行った占いの記録なのです。殷王朝では、天候、農業、軍事や王の行動など、王家にかかわるさまざまな事柄を占う習慣がありました。甲骨の裏側に、鑽や鑿と呼ばれる小さな穴をほり、そこに熱を加えると、

表面に亀裂(ひび割れ)が生じます。貞人(占い師)たちは、その亀裂の形状によって事の吉凶を占い、その結果を亀裂のそばに刻したのです。では簡単に、占いの方法を記してみます。

- ①まず、亀の甲や牛の肩胛骨の表面をなめらかにして、占いに使いやすいよう整えます。
- ②次に、甲骨の裏面に小さな穴(鑽、鑿)をほります(図2)。
- ③占う内容を決めます。
- ④穴(鑽)の部分に熱を加えます(図2に、焦げ跡があります)。
- ⑤その熱によって甲骨の表面にできたひび割れを見て、吉か凶かを判断します。

⑥最後に、占った内容とその結果を甲骨に書き、刻します。

図1・2に示した甲骨文は、天候に関する占いで、「雨が降るかどうか」と尋ねて(図1)、占った結果、「雨が降る」と判断しています(図2)。この甲骨文にある「雨」という字の形は、空から水がしたたり落ちてくる様子を表しています。また、「卜」という字は訓読みで「うらなう」と読み、これはひび割れの形を表しています。「ボク」という音読みは、骨がひび割れたときに発する音からきたものだともいわれています。「卜」字は、甲骨の占いから生まれた漢字なのです。

3 甲骨文の書体区分

甲骨文は、用いられた字形や書体の特徴から、五つの時期に分けることができます。それを明らかにしたのが、殷墟の発掘に指導的役割を果たした考古学者董作賓(一八九五～一九六三)です。では、五期の時代区分について、流れを追いながら簡単に説明しましょう。

最初はのびのびと力強く(第一期：雄偉)、だんだんおとなしくなり(第二期：謹飭)、慣れも加わって次第に墮落の傾

表

図1 牛肩胛骨(第一期)の表面

庚辰
卜。賓貞。
丁亥其
雨。
【読み】
庚辰に
卜へり。賓が貞ふ。
丁亥に其れ
雨ふらんか。」と。

裏

図2 牛肩胛骨(第一期)の裏面

王固曰。其雨。
【読み】
王固て曰く、「其れ雨ふらん。」

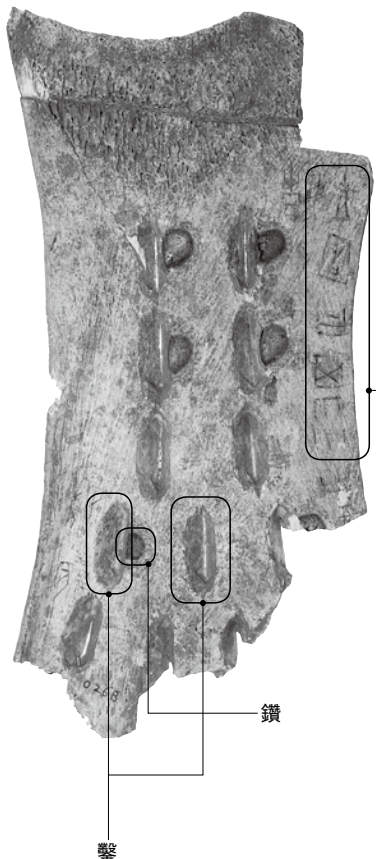


図1～6すべて台東区立書道博物館蔵

▶図6 泰山刻石―百六十五字本―



▶図5 石鼓文―安国本―



古いに用いた最古の漢字である甲骨文に始まり、王室の権威を誇示した青銅器の銘文、そして春秋戦国時代の動乱期を経て、秦の始皇帝が文字を統一して制定した正式な篆書まで、古代文字はさまざまに変化を遂げていきました。こうした文字の不思議な形を通して、限らない広がりをもった漢字の世界に興味をもってくだされば幸いです。

源流となったものです。秦時代の始皇帝は、大篆を基礎に文字を統一し、正式な篆書体である小篆を制定しました。小篆の代表的なものとして「泰山刻石」(図6)があり、これは秦の始皇帝による全国統一の偉業をたたえた記念碑としてよく知られています。また始皇帝は、度量衡も整備し、重さや容積に関して一定の単位ごとに基準器を作りました。「權」は、重さをはかる分銅、「量」は容積をはかる枬です。基準器には、どれも始皇帝の全国統一をたたえる四十文字の詔勅(皇帝の文書)が小篆で記されています。

漢字の世界にふれよう

今回ご紹介した甲骨文や青銅器は、下記の博物館でご覧いただくことができます。

台東区立書道博物館

本館にてさまざまな甲骨文、青銅器を展示しています。
 ■アクセス：JR鶯谷駅北口から徒歩5分
 ■H P：http://www.taitocity.net/taito/shodou

東京国立博物館

東洋館8室では、特集陳列「中村不折と高島菊次郎」において書道博物館の所蔵品が展示されます。
 ■会 期：2014年2月4日(火)～3月30日(日)
 ■アクセス：JR上野駅公園口、鶯谷駅南口から徒歩10分
 ■H P：http://www.tnm.jp
 ■主な展示作品：石鼓文―安国本―(戦国/前5～前4世紀頃) 台東区立書道博物館蔵
 泰山刻石―百六十五字本―(秦/前219) 台東区立書道博物館蔵

鍋島稲子
 台東区立書道博物館主任研究員。筑波大学大学院芸術学研究科博士課程修了。博士(芸術学)。東京国立博物館客員研究員。大阪教育大学非常勤講師。

4 甲骨文の重要性

甲骨文が発見されたのは一八九九年、つまり約百年前のことです。日本では明治三十二年にあたりますから、江戸時代や明治初めの人たちは、甲骨文の存在を知らなかったこととなります。ところが甲骨文の出現によって、三千年以上も前の中国の人々の生活が明らかになりました。これは書の歴史だけでなく、世界の歴史にとっても重大な発見だったので、私たちが普段使っている漢字の始まりは、こうした絵文字のような、自由で楽しいものでした。古代の中国で使われた文字が、少しずつ姿かたちを変えながら

向となりますが(第三期…頽廢)、一種のルネッサンスにより一時的にもち直し、第一期のような強さが再び現れて(第四期…勁峭)、最後にはこじんまりとまとまります(第五期…嚴整)。このように、最初は粗削りで野性的だったものが次第に整齊され、同時にすがすがしさを失っていったんは退廃し、また立ち直つてまとまり始め、最後は完成に向けてきれいに整っていきます。

5 篆書が完成するまで

―金文、大篆、小篆―

甲骨文に次ぐ古い文字は、青銅器に鑄込まれた金文です。青銅器は殷時代より作られていましたが、西周時代(紀元前十一～八世紀)にその製作が最も盛んに

現在の漢字につながっているため、今の私たちにも解読できる甲骨文があるのは、実に驚くべきことです。これが漢字のとてもおもしろいところであり、他の国々の文字にはない特徴です。甲骨文の不思議な世界は、漢字の始まりの秘密を解き明かす重要な鍵となっているのです。



▶図4 小克鼎の内側に鑄込まれた銘文



▶図3 小克鼎

なり、銘文(青銅器の文字)も長文化します。この時期の銘文は、西周の王室あるいは上層貴族など、ごく限られた人たちによるもので、文字の統一性が比較的保たれており、端正かつ堂々とした書きぶりです。紀元前九世紀頃に作られた小克鼎(図3)には、優美で洗練された書体の銘文が鑄込まれています(図4)。周の権力が衰えると、多数の国が興る春秋戦国時代に入ります。この時代の文字は地方によって異なり、南方の楚系文字や西方の秦系文字など、種々の字形が存在します。また青銅器以外に、石に刻された文字も新たに出現します。現存する最古の石刻文字である「石鼓文」(図5)は、大篆あるいは籀文といわれ、篆書の



さんぱつやきょうこそん

長谷川義史 作

定価：本体1,200円＋税
ISBN978-4-89528-687-9

世界を舞台にした、中学生リョウたちの
せつなくもきらめく青春物語



リョウ&ナオ

川端裕人 著

定価：本体1,600円＋税
ISBN978-4-89528-689-3

好評発売中！
飛ぶ教室の本

飛ぶ教室

「飛ぶ教室」は、子どもの本と子どもの文化を掘り下げる総合誌を目指して、昭和56年に発刊した児童文学雑誌です。作家の個性がふれる童話や短編、絵本の書きおろし作品のほか、作家や作品の魅力に迫るインタビューや座談会など、読みごたえある企画満載です。

定価：本体952円＋税
年4回発行
(1・4・7・10月の25日)

1/25
発売



第36号
特集「手紙」

つながる、ひろがる、私の教科書



Connecting to the Next Education for Teachers and Students

2013年9月、光村図書を含む教科書会社12社と株式会社日立ソリューションズからなるコンソーシアム「CoNETS（コネッツ）」が発足しました。

「CoNETS」のコンセプトは、「デジタル教科書のスタンダードを目指す」。これまで、教科や教科書会社によって異なっていたデジタル教科書の操作性を統一し、さまざまな端末で使用できるマルチプラットフォームを開発します。それにより、教科や学年を超えた新たな学びが生まれます。

2015年4月の小学校の教科書改訂時をスタートに、中学校、高等学校の順で、製品をリリースしていきます。

「CoNETS」は、教科書づくりで培ったノウハウで、デジタル教科書の新たな可能性をかたちにし、これからも子どもたちの学びと教育現場をサポートしていきます。

www.conets.jp

